

## 都市インフラ調査研究・ヨーロッパ

Grant ID S3RR09001

Research representative: 伊藤 毅

### 1. 研究の概要

本研究は都市のインフラストラクチャー（以下、「都市インフラ」）の類型論的・地域史的比較を試みながら、都市インフラ概念の深化と拡大を推し進め、現代都市がかかえる喫緊の諸問題に対し、関連する専門分野の先端的な統合するかたちで一定の寄与を行うことを目的とする。

21世紀に入り直面しつつある都市の問題群の背景のひとつは、都市をさまざまなレベルで下支えする基幹施設である都市インフラ（社会資本、エネルギー研究、社会関係資本などを含む）の問題として焦点化することが可能である。しかし都市インフラの歴史・文化的側面や政治・社会的側面の研究は著しく遅れており、建築史・都市史・土木史などを有機的かつ緊密に連携する方法と場の共有が俟たれている。

以上の研究の趣旨の下、昨年度に引き続き、建築学専攻伊藤毅研究室、都市工学専攻都市デザイン研究室、社会基盤工学景観研究室、西洋史学研究者、他大学西洋建築史研究者のメンバーからなる沼地研究会にて活動を行ってきた。同研究会は主としてオランダ調査研究をベースとして、論文購読・資料収集・現地調査などを共同研究として行うものである。

2009年度は月一回のペースで複数の報告を含む勉強会と、2度のオランダ・フリースラント現地調査を行った。本報告書では主として現地調査の内容・結果・分析について記述する。2010年度は引き続きオランダ都市史に関する文献の輪読や、関係諸論文の勉強会、調査結果の分析・検討、を行っていく。また2010年も建築実測・街区実測によるオランダ・フリースラント現地調査を実施する。加えて、フランス・イタリアの低湿地へと研究領域を広げて行く予定である。なお本報告は、初田香成・松田法子・金ウジン・宮脇哲司が中心となり作成した。

### 2. オランダ・フリースラント現地調査

#### 2.1. フリースラント州 11 都市

2010年は2度に渡り、オランダ・フリースラント州内の都市について現地調査を行った。まず、同州と我々が調査対象としている11都市(elf steden)について簡単に説明する。フリースラント州とはオランダに11ある州のひとつで、北海に面し、アイセル湖をはさんで北ホラント州と向かい合う。州都はLeeuwardenである。面積は約57,000km<sup>2</sup>で、内40%以上が水域である。州内の人口は65万人ほど、人口密度192人/km<sup>2</sup>はオランダ11州中、最も低い。市街地を外れば広大な牧草地で、道路から狭い堀の向こう側には牛や羊が牧草を食む景色が広がる。その文化においても他の州とは異なる点が多く、フリースラント州はオランダ内で唯一オランダ語の他にフリジア語という言語を公用語とし、人々は少数民族フリース人として他と区別されている。

また、フリースラント州にはテルプ(terp、複数形はterpen)と呼ばれるマウンド上の集落が数多く存在する。これは、歴史的に常に先端的であったオランダの利水技術の起源として位置づけられるものであり、それが現在においても観察できることは特筆に値する。

フリースラントには11都市(elf steden)としてまとめられる都市群がある。Leeuwarden、Sneek、IJlst、Sloten、Franeker、Harlingen、Bolsward、Stavoren、Hindeloopen、Dokkum、Workumの11である。フリースラントの人々はそのつながりを文化的・歴史的に非常に強く意識しており、フリースラント州はこの11都市を核として世界文化遺産登録を申請しようとしている。これら11都市は中世期に都市特権を獲得しており、歴史的に、政治・商業等、様々な点でフリースラントの基盤となった都市であった。それぞれの都市は非常に多様であり、大きさ、地勢、都市の核(教会、大学、港湾等)、言語(フリジア語以外にも、それぞれに異なる言語、方言がある)など、それぞれの都市の個性が強く観察できる。

これら一見ばらばらの都市が、緊密な一群として認識されていることは非常に興味深い。我々はこの11都市を、それぞれが役割分担を行いながら、全体でひとつの都市として機能する「一群の都市」と考えている。そしてその結びつきを担保するのが、都市を結ぶ運河やそれを中心に育まれてきた文化に代表される都市インフラであると考え、その論点のもとに現地調査を行うものである。

#### 2.2. 第一回フリースラント調査

2009年の9月23日から29日にかけて、一度目のフリースラント調査を行った。直後に本調査を行なう予定であり、そのための予備調査であった。その目的は以下の4点である。

- ①現地カウンターパートとの関係構築
- ②研究に必要な資料・文献の蒐集
- ③調査候補都市の実見、絞り込み
- ④調査対象とする建築、街区の決定

目的①のためフリースラント州庁舎にて、州の複数の担当部署の役人、美術館とアーカイブの担当者らと会合を行い、州のクイーンズコミッショナーとも会談を行った。また、研究機関Fryske Akademyの研究者と会合、意見交換を行った。目的②のため、自治体の資料の確認、現地書店での書籍・資料購入を行った。目的③④のため、現地役人の方の案内を受けつつ、11都市全ての見学を行い、結果、Sloten、Franeker、Harlingenの3都市にて実測調査を行なうことに決定、さらに建築実測、街区実測の対象も決定した。調査の基本情報は以下のとおりである。

日時：2009年9月23日～9月29日

滞在地：Leeuwarden

調査都市：Leeuwarden, Dokkum, Sloten, IJlst, Sneek, Franeker, Harlingen, Bolsward, Stavoren, Hindeloopen, Workum

参加者：伊藤毅(建築学専攻教授)  
初田香成(GCOE 特任助教)  
宮脇哲司(建築学専攻伊藤研究室修士課程)  
(身分は当時)

### 2.3. 第二回フリースラント調査

二度目のフリースラント調査は10月29日から11月11日まで実施した。その目的は以下の3点である。

- ①建築の実測を含めた調査
- ②都市・街区の実測を含めた調査
- ③2010年度調査のための予備調査

目的①②については、前回の調査をふまえ、収集した資料を用い事前準備をした上で、Sloten, Franeker, Harlingenの3都市において住宅建築、街区の実測調査を行った。その調査結果は次節以降で記述する。目的③については、実測調査の合間に、2010年度調査予定のIJlst, Sneek, Hindeloopenの3都市に赴き、調査対象となる住宅・街区の絞り込みを行った。基本情報は以下のとおりである。

日時：2009年10月29日～11月11日

滞在地：Sneek

調査都市：Sloten, Franeker, Harlingen

参加者：伊藤毅(建築学専攻教授)  
初田香成(GCOE 特任助教)  
松田法子(建築学専攻日本学術振興会特別研究員)  
金銀眞(東洋文化研究所外国人研究員)  
江本弘(建築学専攻伊藤研究室修士課程)  
宮脇哲司(建築学専攻伊藤研究室修士課程)  
奥原徹(建築学専攻伊藤研究室修士課程)  
小島見和(建築学専攻伊藤研究室修士課程)  
(身分は当時)

## 3. 調査内容

### 3.1. 建築調査

#### 3.1.1 スローテン

今回は、住宅を中心に計12軒の建築調査を行い、うち9軒について実測を実施した(図3-1-1)。スローテンでは下記の7軒について、それぞれ平面図・断面図・配置図を採取し、聞き取りを行った。なお、スローテンで調査した物件はすべて、街の中心を南北に貫く運河沿いに立地するものを選定し、特に運河および街路との関係に注目しながら調査を進めた(図3-1-2)。

- (1) Voorstreek 111 : ファサードのアンカー(壁面と梁を繋結する金具)に1691年の表示がある。母屋と、比較的奥行きが深い付属屋からなる。付属屋はかつて牛舎であったという。当家屋はスローテンの中心部に位置しており、都市内部における(酪)農家的要素の混在について考えるうえでも見落とせない。
- (2) Heerenwal 53 : スローテン最大級の住宅で、かつては市長の住まいであった。教会の南に隣接する。アンカーに1610年(南棟)および1671年(北棟)の表示がある。両棟はよく似たファサードをもつが、間口幅やプランに異同がある(北棟のみに地下室があるなど)。

2棟の切り妻を対にして一軒の家屋を構成する点が大きな特徴である(後述、Heerenwal 61も同様)。

- (3) Heerenwal 46 : 運河と、これに直交する道との交差点に位置する。元バターディーラーの家で、玄関横の鉄柵にはこの商人の頭文字が看取される。内部にはオリジナルの造り付け家具などが残る。
- (4) Lindegracht 13 : 現在は、アムステルダムに居住する家族のセカンドハウスとして使われている。内部は改造が多いが、一層にアティック(小屋裏)を伴う構成で、スローテンにおける住宅の典型的事例である。
- (5) Voorstreek 114 : 他の住宅に比べて一階玄関前の廊下幅が広く、ここを一時ペーカリーの店舗にあてていたらしい。店舗併設住宅の類例としても見逃せない。
- (6) Lindegracht 14 : 母屋・中庭・付属屋からなる敷地利用の三層構成と、前室・後室、および両室に挟まれた小さな部屋とからなる屋内平面の三層構成が、ともに明確に読み取れる事例である。
- (7) Heerenwal 61 : 切り妻2棟を連結して建てる住宅で、現在は南棟で肉屋を営む。ファサードに1776年の銘がある。

#### 3.1.2 フラネケル

フラネケルでは次の2軒について聞き取り調査を行った。

- (1) Nieuwe Hof 18 : 教会の裏側に位置する集合住宅で、特に単身の女性を収容する一種の慈善施設だったようである。
- (2) Eise Eisingastraat 28 : 穀物の計量所で、水門近くの運河の合流点に立地する。ファサードに1634年の銘がある。今回の調査対象中、唯一住宅ではないが、運河や舟運の状況を手がかりに建築-インフラ-都市を連続的に捉える観点から注目している。

#### 3.1.3 ハーリンヘン

ハーリンヘンでは、2軒の実測調査と1軒の聞き取り調査を行った。

- (1) Noorderhaven 62 : 今回の調査対象中、最大のもので、地下室を含め全6層からなる。ハーリンヘンの最も主要な運河に面して建つ。ファサードの中央にドア状の開閉部が見られる点などには、周辺に建ち並ぶ倉庫建築との類型的な連続性も指摘される。
- (2) Noorderhaven 20 : Noorderhaven 62と同じ運河沿いに建つ。ファサードに1756年の銘がある。内部は全体に改造が多く、聞き取りに基づき略復原図を採取した。
- (3) Grote Ossenmarkt 21 : 運河には面さず、ハーリンヘン南東部の住宅街に位置する住宅である。周辺には当住宅と同様に、コーニス(軒蛇腹)をもつ寄せ棟の家屋が多く分布する。

#### 3.1.4 注目点と考察の手法

フリースラントないしオランダの(住宅)建築と都市について考察を進めるうえで、今回の調査からは以下5つの注目すべき要素を抽出した。

- (1) ファサード : アムステルダムの住宅建築にかんする既往研究(Tim Killiam『Amsterdam Canal Guide』1978年、Herman Janse『Amsterdam gebouwd op palen』1993年、H.J.Zantkuijl『Bouwen in Amsterdam』2007年/以下同)では、ゲープル(切り妻破風)の形状と建築年代との対応が指摘されている。本調査で採取したゲープルの形状と住宅の建築年代の間にも、おおよそ同様の対応関係が確認された。1600年前後～1665年前後の形式とされるステップ(階段状)ゲープルにはスロー

テンの Voorstreek 111 (1610/1671 年) が該当し、同 1620 年前後～1720 年前後の形式とされるスパウト(筒口状)ゲートルにはハーリンヘンの Noorderhaven 62 (1648 年) および同 20 (1756 年) が該当、1660 年前後～1790 年前後の形式とされるベル(鐘状)ゲートルにはスローテンの Heerenwal 46 (1764 年) および同 61 (1776 年) が該当する。

その一方で今回調査した 3 都市では、スパウトゲートルないしはコーニス有する寄せ棟の低層住宅が数多く確認された。これはアムステルダムとフリースラント諸都市との規模的・地域的差異にも関わる特徴であると思われる。

- (2) 意匠 : ここでは、窓上部の煉瓦積み形式と年代との関係について挙げておく。煉瓦の積み方には、半円に近いアーチを描くもの、低いアーチを描くもの、扁平なものなどがあり、これらと建築年代との対応関係が指摘される。
- (3) 材料 : ここでは、煉瓦について挙げておく。調査家屋には、複数の異なる色味および縦横比率をもつ煉瓦が看取された。これらは一軒の家屋にも混在して用いられ、例えば赤褐色系の煉瓦はファサードに、黄色系の煉瓦はそれ以外の場所に使われていることが多い。既往研究では煉瓦の積み方別に建築年代の違いが指摘されており、調査家屋への適用・検証は今後の課題のひとつである。
- (4) 構造 : ここでは、小屋組の形式について挙げておく。既往研究では、アティックの床板(ゾルデル)を支える柱と方杖の形状が時代によって異なることが指摘されている。また、元床板を指す名称「ゾルデル」が、アティックの下層階全体を指す用語に転じ、加えて元床板根桁を指す用語「フリーリング」が、アティックの上層階を指す用語に転じたとされる。

運河沿いの住宅においては、アティックにいかにも大空間を確保するかがひとつの課題であったと思われる。部材の名称から場所の名称に転化・拡大されたこのような用語の変遷は、ホイストビーム(荷揚げ梁)や前面に傾斜するファサードの形状などと共に、物資の運搬ないし貯蔵のために生じる、運河・前面街路と小屋裏との密接な関係を示すものとして注目される。加えてこれらは、妻入りに限定される家並みの形成とも切り離しがたい諸要素であることが指摘されよう。小屋裏空間の分析は、運河や街路などのインフラと(住宅)建築とを論じる際に、ひとつの要になると思われる。

- (5) 平面 : 今回調査した住宅建築には、復原すると「一列三間取り型」とでも言えそうな平面を構成するものが多く見受けられた(図 3-1-3)。平面の片側には玄関と裏玄関をつなぐ廊下を通り、もう一方に、前室・後室、およびこれら両室に挟まれる小さな部屋の、計 3 室が配置される。中央の小さな部屋は、カップボードなどの作り付け家具で前後の室と区切られている。この部屋はかつて寝室であったとの聞き取りも得た。前室のインテリアは総じて格が高い。カップボードや暖炉には淡彩色のパネル装飾が付加される。これらの装飾には住人の素性が示されることがあり、例えば乳製品のディーラーの家ではおおむねバレル(樽)のオーナメントが取り付けられている。後室は台所を兼ねるなど、前室に比べより内向きの性格をもつ部屋であると考えられる。

住宅内部のこのような三層構成に加えて、基本的に敷地も母屋・中庭・付属屋からなる三層構成をもつ。

それに加えて、ファサードの壁面線と前面道路との間に設けられるわずかな空間(ストップ)の存在が指摘される。ここは基本的に各家の所有地で、柵などで囲い込まれている。ストップのありようは、建築と街路-都市とのつながりを考察していく上で注目される。



図 3-1-1 調査対象一覧

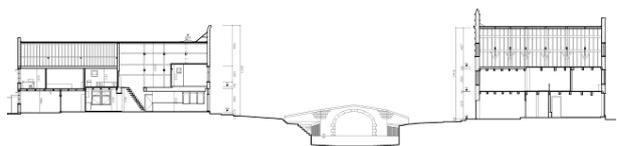


図 3-1-2 住宅と運河の連続断面図(スローテン)

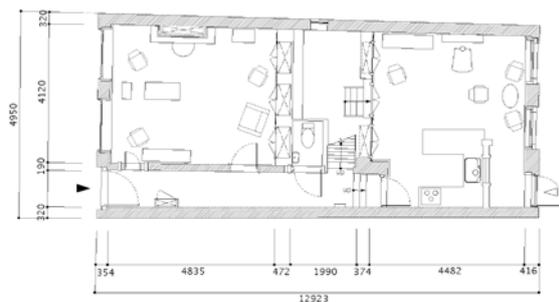


図 3-1-3 Lindegracht 14 一階現状平面図

### 3.1.5 今後の調査に向けて

今回の現地調査と今後の分析では、次に挙げる3段階の視点と方法によって、「都市インフラ調査研究」としての建築調査を進めていくことが目指される。

- (1) 建築各部要素の特徴把握
- (2) (住宅) 建築の編年
- (3) 都市と建築とを接続する方法のあぶりだし

このうち、(1)および(2)は、前項に挙げたような諸点に関する調査と分析を、さらに深化させながら推進する。そのうえでさらに(3)においては、運河・街路・街区(=インフラ)と、フリースラントないしオランダ諸都市の(住宅)建築とを一体に捉えていく方法を築く必要がある。この点が本研究に特徴的な視点と方法をなすものであり、(1)と(2)は、そのための準備的考察にも位置づけられる。

第12回沼地研究会(2010年5月10日)では、報告「“ペアハウス”とスローテンの『都市史』」(松田法子)において、2棟の切妻が並ぶ1戸建ての住宅(通称“ペアハウス”)の立地や発生の意味を、16C末から17C初めにおけるスローテンの都市改変(要塞化などによる街路や街区の再編)と共に考察し、今後展開されるべき建築と都市・インフラとの統合的な考察に着手した。

## 3.2 スローテン

### 3.2.1 概略

スローテンはフリースラント州の南部に位置する。自然の微高地であり、古くからの居住がみられ、南北の水上交通と東西の陸上交通の結節点として商業・軍事的拠点として発展した。そのため、十字型の都市プランが現在も明瞭に読み取ることができる。また13世紀・16世紀に要塞化、現在も稜堡があり運河が周囲を巡っている。

最も特徴的なのはその都市の小ささである。スローテンはオランダで最も小さい都市と呼ばれており、濠に囲われた旧市街部は250m×250mほどの大きさしかない。ここでいう都市とは中世期に都市特権を取得していたことに起因しており、スローテンは1426年に取得していたとされる。その大きさで都市としての機能を持ち得たことは、場所の重要性と、そこで営んでいた商人達の力を物語っている。

### 3.2.2 調査概要

スローテンでは運河西側の2街区(図3-3-1)について詳細な街区調査を行った。記録したのは以下の項目である。

- ① 屋根伏形状
- ② 建物種別
- ③ 階数
- ④ アプローチ
- ⑤ 建物隙間寸法
- ⑥ 建物間口寸法
- ⑦ ゲーブル形状
- ⑧ レンガの積み方

それぞれの街区についての調査結果の概要を述べる。

#### (1) 街区① (Voorstreek - Brouwersteeg - Bakkerstraat - Slotmakersteeg - Dubbelstraat)

この街区は運河を挟んで教会の対面に位置し、現在のスローテンでは建築が最も建て込んだ街区である。運河に垂直な短冊状の敷地が並び、Voorstreek(運河沿いの道)に対して妻入りの住宅が並ぶ。その間口はおよそ6~7m程度である。2層の住宅が多いが、街区の北側運河沿いには

3層の建築があり、1階は店舗である。うち1棟は角地に建ち、かつて小麦・乳製品など交易品の計量を行う特権者のものであった。この角地付近では、Dubbelstraat(中央を東西に横切る道)とVoorstreekの両方に面するL字型・T字型の敷地が存在し、都市的な土地利用形態が見られる。また、Voorstreek沿いには敷地内での1m強のセットバックがあるが、Dubbelstraat沿いでは見られない。この領域はストップと呼ばれ、道路面から一段上げられている。一方でBakkerstraat、Slotmakersteeg沿いは付属屋が並ぶ裏側である。

#### (2) 街区② (Dubbelstraat - Slotmakersteeg - Kattesteeg - Kapelstreek)

Dubbelstraatを挟み街区①の北側に位置する街区である。街区①とは異なり、Dubbelstraatに対して垂直の短冊状敷地である。間口寸法は6~7mと街区①と変わらないが、全て2層であり、またオープンスペースの割合が大きい。Kapelstreek(運河沿いの道)に面した2軒以外はストップを持っていない。



図3-2-1 スローテンの航空写真



図3-2-2 1616年のスローテン絵図

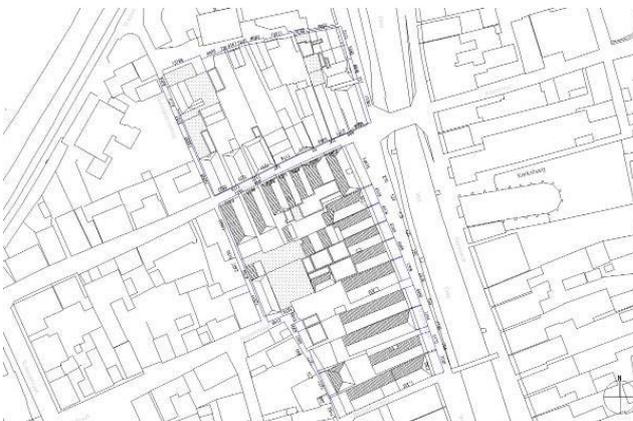


図3-2-3 街区調査図面例

### 3.2.3 論点

#### (1) 平面構成

「ストップ—母屋—中庭—付属屋」という平面の四層構成が基本である。これはフリースラントの農家の典型である「Kop-hals-romp」（頭—首—胴の意）が都市内部において適応されたものとも考えられる。特に街区①の南側で顕著に見られる。街区①は運河沿い Voorstreek を表側とし奥へとこの四層構成が展開されており、北部ではこの基本に加え、Dubbelstraat という別の軸へのアプローチ、都市中心部での高密度化により、L字型・T字型といった複雑な土地形態が生じたと推測できる。

#### (2) 都市内部のヒエラルキー

スローテンは南北の水路と東西の陸路の十字型が軸となっているが、中世の早い時期から、水路の重要性が増し、陸路より優先されている。事実、東への陸路は16世紀の絵図において、すでに、濠により断ち切られている。その軸に沿う土地利用は、運河沿いには教会・市庁舎の公共建築や大商人の邸宅が並び、直行する陸路沿いには職人などの住宅が並び、と、歴史的に明確なヒエラルキーが存在している。

加えて、2軸の結節点である中心から、農家が現存する濠に隣接した周縁部へとという関係性も指摘できる。これは土地の高低差とも関連している。我々からすれば非常に小さな差ではあるが、常に水難に晒されてきたオランダではその僅かな偏差が大きな意味を持つ。スローテンで最も高い場所は街区①の北側、最も高密かつ都市的と見られる地点である。

#### (3) 路地／隣棟間隔

フリースラントのタウンハウスでは、その隣棟間隔に様々なバリエーションが見られるが、スローテンに特徴的なものとして、両側の住戸が共同で利用する路地がある。その土地は一方が所有しているが、他方が利用権を公的に持っていることもある。誰もが通れ、時に街区を貫く導線として機能するパブリックな路地と、片側の一戸のみが所有・利用し、住戸に内部化されることも有るプライベートな路地との中間に位置するこの路地は、スローテンが都市の成立段階の性質を現在も保持していることの表れとも考えられる。スローテンにおいて住宅建築と都市とを連続的に捉える際の重要なファクターである。

#### (4) ペアハウス

前章と重複するので、ここでは説明を割愛するが、路地同様、建築と都市を結びつける重要な装置と考えられる。

### 3.2.4 今後の課題と展望

上述の論点を更に発展させるべき、今後の分析の指針として、大きく次の3点が挙げられる。

#### (1) 都市の経年変化

#### (2) 住宅建築—街区—都市の一体的分析

#### (3) 11 都市での比較分析

(1)では、16世紀以降の複数ある都市図の、史料批判も含めた分析と、19世紀地籍図による都市の復元・分析により、都市の改変を明らかにすることで街区構造の意味付けを深化させる。(2)は(1)と並行し、連続平面・断面・立面の作成・分析を勧める。必要であれば、次回現地調査においてさらなる実測を行う予定である。周縁部の農村的性格の色濃い街区、全体の都市調査、濠の外部は、特に都市のヒエラルキー、農村から都市への移行という観点から重要となるだろう。

(3)では、既に調査に入ったフラネケル、ハーリンヘン、これから調査する都市を貫く評価軸の可能性として、路地／隣棟間隔、ストップが考えられている。ともに公と私の境界に位置する装置であり、その所有と利用の形態を明らかにし、類型化を試みる。そのために、極小でありながら、都市内部に様々な場所性が観察できるスローテンの徹底的な分析が望まれる。

### 3.3 フラネケル

#### 3.3.1 歴史および背景

フラネケルはフリースラント州の北西部で、港町のハーリンヘンと州都レーワルデンを結ぶ位置にある。フラネケルは1374年に都市特権を取得し、一時、フリースラントの主要都市となったが、その座はレーワルデンに奪われている。11都市のなかで、この都市を特徴づけているのはかつて存在したフラネケル大学(1585～1811年)の存在であり、現在もアカデミーが存在している。オランダ最古とも言われるプラネタリウムがあることからわかるように、学問上の拠点であった。

その都市構造を見ると、中心に教会と広場が存在し、西端部の城館跡地との間を結ぶ通りが主要な通りとなっている。かつての絵図を見ると、北東部と南西部に水門が存在し、その間を運河が縦横無尽にひかれていることが確認できる。北東部の水門の近くには穀物計量所もあり、運ばれてきた穀物を計量したり、関税を徴収したりする場所となっていた。前述の教会と城館を結ぶ主要な通りにも、運河が並行して走っていたが、残念なことに中心部の運河は埋め立てられてしまっている。

#### 3.3.2 調査概要

フラネケルでは主要な通りに面し、市庁舎の存在する街区において詳細な街区調査を行うとともに、様々な要素の分布を調べる都市調査を行った。調査はそれぞれ2009年10月31日と11月1日午前に行い、記録したのは以下の項目である。

都市調査：ゲートルを持つ家屋とその種類、年代表示のある家屋と路地、ホイストビーム、路地の位置と幅、立面写真

街区調査：立面写真、回数、ファサード形状(ゲートル)、屋根伏形状、建物種別、階数、アプローチ、建物隙間寸法、建物間口寸法、路地の位置・幅員

##### (1) 都市調査

建物の建築年代が判明するもので古いものは中央の通りと北東の水門付近に集中している。ここからは、城館と教会を結ぶ通りや、水門近くから都市が発展していった様子がうかがわれる。また中央の主要な通りに平行して、一本北側を東西に走る通りは、比較的新しく(20世紀初頭くらい?)商店街となった様子がうかがわれ、それぞれの地区によって発展のピークが異なると考えられる。

多くの建築のファサードはコーニスであり、二階にドーマーウィンドウを持っている。数は少ないが、外周部に近いほうところに比較的多様なゲートルが見られた。

##### (2) 街区調査

この街区を対象に選定したのは、市庁舎が存在し建物が建て込んでいる、最も都市的な街区と考えたためである。街区を複数のレベルにより多層的に使用している点など

が、この都市の都市空間を説明するのにふさわしいと考えている。

街区のうち主要な通りに面した建築の1階は大半が店舗となっている。特にほとんどの建築は7m弱と間口がほぼ均等であり、そのファサードがコーニスとなっており、二階にドーマーウィンドウを持っている点で統一されている。一方、敷地の裏側には複数戸につながる路地が複数、反対側の通りから通じている。路地からは、階段によって各家屋の2階にアプローチすることができる。敷地の奥に向かって増築された建築が陸屋根となっており、その上が人工地盤的なテラスとして使用されている。これは表側の通りに面した建築の2階以上の居住部分への主要なアプローチとなっており、1階の店舗は表通りから、2階以上の住居には裏通りから路地を通じてアプローチすることで、動線を区別しているのである。これらは現時点では他の都市では見られないフラネケルに特有の特徴である。

### 3.3.3 論点と今後の課題

#### (1)都市住宅の誕生

街区調査で対象とした街区に見られた、統一されたファサード、ほぼ均等な間口、1階店舗と2階以上の居住部分への動線の使い分け、裏通りからの路地につながる人工地盤的なテラスといった諸特徴をもって、フラネケルにおける街区型の都市住宅の成立と見なせるのではないか。既に述べたように、この街区は最も都市化が進んだ街区であり、建築を裏側に増築する過程で、こうした多層的な利用による解決がなされたと考えられる。とくに間口やファサードなどが統一されていることから、ある時期にこれらをまとめて再整理した可能性が強い。それは主要な通りに面した1階部分が商店街化するプロセスと連動していたとも考えられる。

#### (2)敷地割の形成過程

1832年時点の土地台帳から復元した当時の敷地割は、一部相違点はあるものの、基本的に現在にそのまま継続するものとなっている。(1)の論点とも通じるが、既に間口は統一されており、これ以前に敷地割りが計画されたのではないかと考えている。とくに北側の通りに面した敷地境界線が通りと斜めにぶつかるのに対し、南側の主要な通りには直角にぶつかっていることから、その際には主要な通りの側から敷地が形成されたと考えられる(当時、南側の主要な通り側には商店が既に多かったのに対し、北側の裏通りに面しては倉庫などが存在していたことからもうかがえる)。こうして形成された敷地割は、基本的に主要通り側からの方が奥まで伸びており、かつ裏通りに通じる路地を持つため旗竿型の敷地となっていることが特徴である。今後は周辺の街区の過去の土地台帳分析も行い、フラネケルの敷地割の形成過程を復元し、上述の諸特徴との関係を分析することが課題となる。

#### (3)路地の類型化

フラネケルでは、路地は全域にわたって多数存在している。なかでも各都市と比較してみると、通り抜けられない路地がほとんどで、比較的幅員(1200mmなど)で複数の家で共用するものが多く見られた(スローテンのように両側の家だけでなく三戸以上で使用するものもあった)。また屋根がかけられ屋内化されているものも見られた。これらはスローテンともハーリンヘンとも異なる特徴であり、さらなる意義付けが必要である。

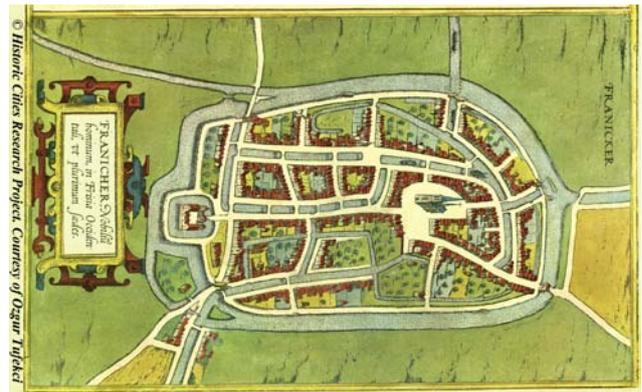


図 3-3-1 1581年のフラネケルの絵図

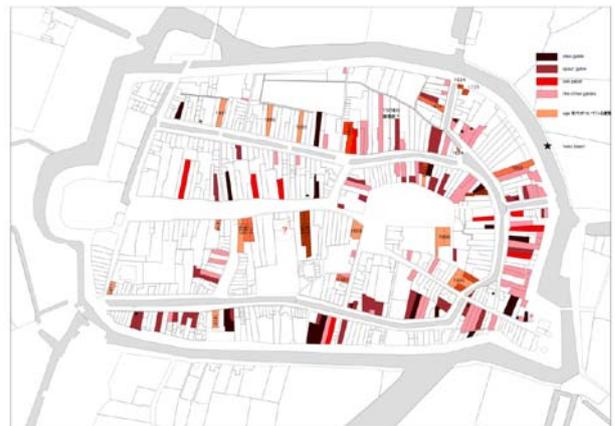


図 3-3-2 フラネケルの都市調査の図面



図 3-3-3 フラネケルの街区調査の図面



街区調査対象地の写真。図 3-3-4(左上)は表通りに面したファサード(1階は店舗)。図 3-3-5(右上)は裏通りからの路地。二階にアプローチする。図 3-3-6(左下)は人工地盤的に用いられているテラス。

### 3.4 ハーリンヘン

#### 3.4.1 歴史および背景

14 世紀半ば、図 3-4-1 からみられるように「最も古く、一番西方に位置する集落」\*<sub>1</sub>であった Almenum の地域（右下の教会中心とする地域）と海に面している Harlingen の定住地域（運河を中心とする）が構成されていた。

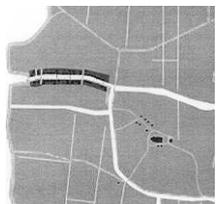


図 3-4-1 1350 年 Harlingen の絵図\*<sub>2</sub>



図 3-4-2 1570 年 Harlingen の絵図\*<sub>3</sub>

14・15 世紀の Harlingen は他のフリースラントの港をしるぐほどになった。図 2 のように 16 世紀後半には爆発的な成長をもたらしていた\*<sub>4</sub>。このような Harlingen の発達は東側と北側の拡張とともに Almenum の地域を吸収するまでに至った。教会地域である Almenum が Harlingen に含まれて一つの都市化されており、要塞化されていたことが分かる（図 3-4-3）。



図 3-4-3 1616 年 Harlingen の絵図\*<sub>5</sub>

このハーリンヘンの歴史は 4 つの時期に分けられる。

- ① 成立期：1234-1570 年、しばしば the Schieringers と the V etlorers の抗争に成長が妨げられた。
- ② 繁栄期：1570-1750 年、ハーリンヘンの有利な立地と交易により気候が最大限活用された。都市が急速に拡大し、商業、運輸業、工業の発展や繁栄が見られる。
- ③ 衰退期：1750-1932 年、多くの古い海運業が崩れた。
- ④ 1932 年から現在まで、ハーリンヘンの港として、商業中心としての機能回復\*<sub>6</sub>。

さらに、現在に残っているモニュメントはほとんど繁栄期のものであるといえる。

#### 3.4.2 都市・街区調査

ハーリンヘンで行った都市・街区調査の方法と論点は以下のとおりである・

##### (1) 調査の地域

ハーリンヘンにおける都市街区の調査は大別 2 箇所に分けられる。

- ① 運河を中心とする街区
- ② 教会を中心とする街区

##### (2) 間口の寸法

運河を中心とする街区において、旧市街地の中心地である商業地域と運河の北側地域で分けられる。商業地域の間口は 5 - 6 m の敷地割りとして構成されていることがみられる。その一方、運河の北側は 6 - 7 m の敷地割りとなっている。旧市街地より後に築かれた運河の北側は 17 世紀に拡大により、都市化された地域である。この街区における間口は少し広がっていることが明らかである。

さらに、教会を中心とする街区はほとんど住居地域であり、教会の一部に学校が置かれている。この地域の間口は 4 - 5 m の敷地割りが多くみられる。運河側の街区より、比較的狭い間口は庶民の住宅で構成されている街区の特徴の一つであるといえる。

##### (3) 路地

路地の調査を行っていたが、両側の大通りと繋がっている路地の場合は図 2・3 から分かるように古くから構成された路地がほとんどであり、ハーリンヘン市の所有である。その以外の路地（通り抜けられない路地）は個人地主である。今回の調査を行った他の都市（Sloten・Franeker）に比べて幅広い路地となっているが、これらは共用というより、インディビジュアル的な使い方であると思われる。

##### (4) ウェアハウスとホイストビーム（荷揚げ梁）

現在、ウェアハウスとして使っている建物は主に運河の両側に 14 軒と、商業地域の 3 軒であった。さらに、ホイストビームが設けられたいが、このホイストビームはほぼウェアハウスの建物に設けられており、一般の住宅に設けられているケースは少ないし、教会の地域では見られない。すなわち、ウェアハウスとホイストビームが運河の両側地域に集中しているのは西の海から入ってくる貿易や貨物などの移動が運河を中心と行っていたためと考えられる。ウェアハウスとホイストビームの分布からハーリンヘンの都市における経済中心が読み取れる。

##### (5) ゲーブル

ハーリンヘンで見られるゲーブルはステップゲーブル・スパウトゲーブル・ベルゲーブルである。その中でも運河の地域ではスパウトゲーブル（24 軒）とベルゲーブル（19 軒）が多く、教会の地域はステップゲーブル（5 軒）とベルゲーブル（4 軒）が主なファサードの構成要素となっている。

##### (6) 地下室

街区の地域における地下室の有無について調査を行った。地下室を設けている建物は運河の両側に 27 軒であり、商業地域に 5 軒である。教会の地域では全く地下室を設けていないことが把握できる。



図 3-4-4 Harlingen の街区調査図面例

### 3.4.3 おわりにおよび今後の課題

ハーリンヘンの古くからの二つの地域の性格は現在でも運河と教会を中心とする地域の特徴に継承されている。とくに運河の地域においてはウェアハウス、ホイストビーム、地下室が一つの建物となっているケースが多く見られる。さらに、この地域は高層化している。その一方、教会の地域では低層の住宅で構成されている。つまり、運河の地域はハーリンヘンにおける経済活動が活発に行われていた様子うかがえる。したがって、都市空間に置かれている運河が都市に重要な役割を果たしていたことは言うまでもない。

今後の課題としては、色々の制約のために教会周辺である集合住宅の調査が不足しているが、文献や調査を加えれば集合住宅の原型が考察できると思われる。

- 1) Monunmeten 『Fries 11 stenden』、1999、 p 17.
- 2) Buisman 氏の所蔵
- 3) TRRESOAR の所蔵
- 4) Monunmeten 『Fries 11 stenden』、1999、 p 17.
- 5) J.H.P. van der Vaart en D. de Vries 『DE ELF STEDEN VAN FRIESLAND』 2006 Uitgeversmasstschappij Canaletto, Alphen aan den Rijn, p65.
- 6) Stichting Kultuer en Toerisme yn Frtslan 『Halingen』 1994.